

「あたみ桜」で都市間交流を 年末から新春に開花する早咲き種

早咲き種の「あたみ桜」を有効活用して、観光振興や自治体同士との交流促進に結びつけようと、南足柄市塚原の農園経営・古屋富雄さん（62）が奮闘している。最大の特徴は、年末または年明けから咲き始めるという開花の早さ。神奈川県内では、気候の温暖な横須賀市との間ですでに連携が進んでいる、残るは、あたみ桜の本家ともいえる静岡県熱海市だ。

本家・熱海市と
新しく植えた横須賀市
南足柄の古屋さん



育て始めてから6年になる「あたみ桜」と古屋さん
立観音崎公園パークセンターのオ

古屋さんが所有するあたみ桜は約70本。塚原の丘陵地（箱根外輪山ふもと）に植栽され、今季は暖冬の影響で開花が特に早く、昨年末の時点で数輪咲いた。色は白に近いピンクで、サイズはソメイヨシノよりも小さめ。香りはないと驚いた。数年前から、何よりも、早く咲くのが売り。早咲きで有名な河津桜よりも少し先に開花する。約10年前に熱海市へ出かけた際、川沿いや山沿いに植えられている姿を目にして、古屋さんは「こんなに早く咲く桜は見たことがない」と驚いた。数年前から、

光振興や交流などを推進。あたみ桜がある程度の大きさ（6年生、高さ約5m）に育っている中、春めきよりも早く咲くこの桜を活用し、地域活性化のために新しい取り組みを始めたと思いついた。気候が暖かいほど開花も早まることから、海に近くて温暖な横須賀市に着目。昨年、同市と県にそれぞれ苗木を提供した。県は県立観音崎公園パークセンターのオ

ープンにあわせ、昨年12月に公園敷地内へ植樹したばかり。今後の大きな目標は、あたみ桜を観光資源として長く活用している熱海市との連携強化。自身の農園で育っているあたみ桜を眺めながら、古屋さんは「新しく桜を植えた横須賀市と、本家である熱海市との交流が広がればいい」と話した。同じ桜を持つ2つの市が花による姉妹都市提携



早くも桜の花が開いている

を結んだり、新しい観光名所づくりのため苗木を分け合ったりと、さまざまな構想が思い浮かぶという。熱海市では、あたみ桜を「日本で最も早咲きの桜」として大事に扱い、季節の観光イベントを開くなど広くPRしている。1965年にあたみ桜と命名し、市制施行40周年の77年に市の木に指定した。今月23日からは、糸川遊歩道（同市銀座町）を会場に「あたみ桜糸川桜まつり」が開かれる。花期は例年1月から2月中旬まで。